連載⑤

明治大学寄付講座をのぞいてみた

～組合による社会貢献のカタチ～

学生が自治労組合員（自治体職員）と直接交流

▲講師の三笘さん

第9回の講座テーマは「男女平等の取り組み」で、講師は大分県日田市商工観光部観光課主査の三笘真依子さんだ。単組・県本部での女性部活動や連合大分の活動にも携わってきたことを紹介。運動の積み重ねで男性と女性がともに結婚や出産、育児や介護をしながら働き続けられるワーク・ライフ・バランスの職場環境の整備が進んだことを訴えた。2017年7月に発生した九州北部豪雨災害の対応時の職場体制、職員の勤務状況も紹介。通常業務に加え災害対応の激務で職員が疲弊しないように、組合が連続した勤務時間の上限を当局に要望したことなどを伝えた。学生に質問を投げかけ、働き方について一緒に考える場面も。学生からは「自治労の活動をして良かったことは何か」について質問があった。

講座を終えて三笘さんは「学生のアンケートで『一般的な就職セミナーでは聞けない職場の大変さや問題を聞くことができた』とあった。働きやすい職場環境は皆さんが自分たちでつくっていけることを伝えることができた」と振り返った。

今回の講座終了後には学生と自治体職員の交流会を開催。これは学生が講義以外で聞いてみたいことなどを気軽に話せる場としてや、公共サービス職場で働く組合員との交流をはかるため毎年1回、開講中に行っている。学生と三笘さんに加え自治体職場で働く自治労組合員4人（明大OB2人を含む）が参加した。組合員には3年前に同講座を受講し、現在はケースワーカーとして働く者も。学生は「労働組合の相談窓口は具体的にどこで、誰であるのか」などを質問していた。

交流会に参加した学生に寄付講座の受講理由と感想を聞くと「地方公務員になるには自治体職場で働く方の話を聞くのが一番だと考えた。自治労の存在と活動を知った」（政治経済学部4年男性）、「大変な部分も知って戸惑ったが住民の生活を支える仕事は、人のために働くというやりがいを感じる。地方公務員になって仕事をがんばりたい」（文学部4年女性）と話してくれた。

2009年の講座の立ち上げから関わってきた明大労働教育メディア研究センター客員研究員の高須裕彦さんは交流会の意義について「講義で聞けなかった具体的な働き方などを率直に質問できる機会だ。職場を取り巻く課題やそれを解決するために労働組合（自治労）の活動がある。現場で活躍する方が仕事の実態を伝えることで理解を一層深めてもらえれば」と話した。

▲軽食を食べながら落ち着いた雰囲気の中で行った交流会